
その日私は・・・。

月原 智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その日私は・・・。

【NZマーク】

NZ290B

【作者名】

月原 智

【あらすじ】

物心ついたときから、高い塔に閉じ込められている一人の少女の物語・・・。

第1話

外の世界は、どんな色?
私が知らない外の世界・・・。

目を開けるといつもの世界が始まる。

「朝?」

時間を知ることができるのは、ベッドの隣にあるこの部屋唯一の小窓だけ。

そして、そこから見える景色だけが私が知っている「外の世界」だつた。

6畳ぐらいの小さな部屋に、白いシーツで覆われたベッドと食事をするための小さな丸いテーブルと椅子が1つずつ・・・。それ以外は何もない・・・。

物心ついた時から、私はここにいる。

晴れていた日もあれば、雨が降っていた日もあった。
それでも私は、ここにいた。何をする訳でもなく。

今日も私は、ここにいる。

今日もまた、私のイツモが始まる。

「ハア・・・。」

深いため息をつきつつ椅子に腰掛けた。

食事はいつだって、気がつけば用意されている。

そして、メニューはいつも、小さなロールパンが2つと小皿に入った野菜サラダが1つ、その横にドレッシングの入った小瓶とスープが1皿置いてあるだけだった。

1日中、小窓から外の景色を見て過ごす私にとっては十分な食事だった。

当然のことながら味ですら、いつも同じ。

けれど、ほんの少しだけドレッシングが甘い気がした・・・。

食事を取り終えた私は、イツモのように小窓へと足を進めた。外を見ると、久しぶりに雲ひとつない青空が広がっていた。

「きれい・・・」

ため息混じりにつぶやく。

小窓から見える景色も、いつもたいして変わることはない。けれど、こんなに綺麗な青空を見るとほんの少しぴくわくする。そんな私の期待が届いたのか、鳥たちが見たことのない花を運んできてくれた。

その日私は、外の世界に恋をした。

第2話

「ハア・・・・。」

カタンという小さな音と共に、スプーンを置いた。

鳥たちが花を運んできてから、もう何日目の朝だろう。

窓辺にずっと置かれていた花は、何日も前に枯れてしまっていた。

「ハア・・・・。」

もう一度、大きく深いため息をついた。

これが本当のたいくつなんだと、パンをかじりながらふと思った。

最近、あまり食欲がない。

食べかけた物たちをあとにして、少しの希望と共に窓辺へ向かった。

このところ、雨が続いている・・・。

ボヤつとした暗い空。

カタンッ。

静かな空間に鋭く小さな音が刺さつた。

驚いて振り向くと、そこには慌てて食器片付けている、腰の曲がった老婆がいた。

「だれ？」

私が訪ねると、驚いて老婆はその場から飛びのいた。

「気づかれてしまったようだね・・・。」

蚊の泣くような細い声で、老婆が話し始めた。

「ここにちは、世間知らずのお嬢様。

私はね、この塔の主人に雇われていて、お前さんの身の回りの世話をするように命令されている者を・・・。」

外の世界を知らない私にとっての、初めての会話だった。

それにも、老婆の言っている意味がよくわからない。

「ねえ、ヤトワレテルってなに？ オセワってなに？」

外を知りうと、私は夢中になつてたずねた。

「おやまあ。知らなくて当然だけれど・・・あまりに物を知らなすぎだねえ・・・。」

そう言いつつも、老婆は私の聞くこと全てに答えてくれた。

何時間ぐらい過ぎただろう・・・。

老婆は時計を見ながら私に言つた。

「あらまあ。早く帰らないとご主人様に怒られるわ。

さあ、お話はこれぐらいにしましょう。」

そういうて休めていた手を動かしてテキパキと食器を片付け始めた。

「お願ひもつと私に教えて！！」

私は老婆に必死でたのんだ。

すると老婆は一冊の本を取り出して言つた。

「後は『』に聞いておくれ・・・。」

そう言つて老婆は、あるはずもなかつた扉から部屋を出て行つた。いや、最初から扉はこの部屋に存在していた。そう、それを扉だと認識していなかつただけ。

「あれつて開くんだあ・・・。」

独り言をつぶやきながら扉へ近づき、老婆がしていたのと同じよう

第3話

ガチャ・・・。ガチャガチャ・・・。

扉はいつもこうに開かない。

その時、突然話し声が聞こえた。

「ああ、鍵閉められちゃったねえ。」

「つてか、扉の存在も知らないなんて変なヤツ。」「どうやら、さつきの老婆が置いていった本のほうから聞こえているみたいだった。

私は、恐る恐る振り返つたするとそこには・・・。

「な、何なの？」

ビックリして叫ぶ。

「ハローー俺はタッグ。よろしく」主人。

と、白い帽子をかぶつた変なヤツが言った。

「え？！この変なオンナが新しい主人かよ・・・。ばあさんも人使いあらいいなあ・・・。」

タッグと名乗つた変なの横にいた黒いのが言った。

「変なオンナとは、失礼しちゃう！」

私は反論した。

すると黒いのが言った。

「俺たちのことや扉のことを知らないなんて変なオンナ以外の何者でもないじゃん？」

図星をつれたが、ひるむつもりはなかった。

「なつなによ、あんたたちのほうが変じやない！！髪も長くなれば、目も黒いし・・・。それに・・・」

私が言い終わる前に黒い方が舌打ちした。

「お前、やっぱ変なやつだな・・・。妖精ってやつは髪がながくねえの！それに、俺たちはオトコなんだから髪はのばさねえの！..」

私は何がなんだか解からなくて混乱した。

「妖精つてなに？オトコつて？」

黒いのはため息を吐いた。

「ばあさんが、俺らをお前に預けた理由がわかつたきがするよ・・・」

。

そつ言つて黒いのは大きな本を取り出した。

「お前文字ぐらいは読めるよなあ？」

といつて疑わしそうに私を見る。

反論したいけど、私には反論する言葉すらなかつた。

「私、物心ついたときにはここにいて・・・。

だから、何にも知らない・・・。」

そう言つてあふれ出でくる涙を手で覆いながら、泣き崩れてしまつた。

「おい！泣くことないだろ・・・。勘弁してくれよ・・・。」

黒い妖精は分が悪そうに、頭をかきながら言つた。

「お前がそんなヤツだつたって知らなかつたんだ・・・。わ、悪気なんてなかつたから・・・。」

それでも私は泣き続けた。

みんなと違う・・・。

そう考へると、急に胸が苦しくなつた。

うまく息が出来ない。

鼓動もだんだん早くなつているのを感じる。

「た・・・すけ・・・て・・・」

声にならない・・・。

遠くのほうにかすかに声が聞こえる。

遠のく意識の中で私が覚えているのは、白いのと黒いのの必死な叫び声だけ・・・。

目覚めたのは、ベッドの上だった……。

「おい、お前大丈夫か？」

黒い妖精の声が聞こえた。

ぼおつとした意識の中で、起き上がった。

「ご主人さま、しつかり！」

タッグの声で、完全に目が覚めた。

「頭が、クラクラする……。」

こもり気味の声で答える。

「急に倒れたから、びっくりしたけど……。お前、カコキュウだつたんだな……。」

黒い妖精が言った。

「そいつは、やっかいだな……。」

タッグの言葉に、うなずく私。

「カコキュウかあ……。それじゃあ、いつなるかわからんないから確かにやっかいかも……。」

と返す。

「……。ちよつと待てよ！お前、何で知ってるんだ？」

そう言われてみれば、そうである。

「何でだろう……。」

結局答えは出なかつた。

けれど、その日私は、何かとても大切なことを忘れている気がしてならなかつた……。

不思議なことは、それから毎日の事として起つるようになった。

私は知らないはずなのに……。

知つている。全てを……。

ただ、思い出せないのは、名前だけ……。

そういうえば最近、不思議な夢を見るようになつた。

それまでは、夢なんて見たことがなかったのに・・・。
その夢の内容は、いつも決まっていた。

泣き叫ぶ人々。燃え盛る炎・・・。

親を亡くした子供たち。

そして、自分に向けられている、殺意の視線・・・。

その光景が過ぎ去ると、次には少女の叫び声が聞こえてくる。

「お前が“愛”を知ったから、私たちの世界は闇に染まつた！お前なんか、お前なんか消えてしまえ！！！」

そして、いつもそこで目覚めるのだつた・・・。

第5話

考えてみると、不思議なことは、まだまだ沢山あった。
その中でも、一番の不思議は黒い妖精の名前を私が知っていたこと
だった。

聞いたこと無かったのに、私は知っていた……。

それはある日の午後だった。

私たちは、いつものように世の中についての勉強をしていた。

「だから、俺たちは【妖精】って呼ばれる【生き物】で、お前は【人】って呼ばれる【生き物】なんだ。」

「なるほどねえ・・・けど、名前が付いてても、生き物じゃない物だつてあるのよね。はあ、難しい・・・。」

私は鉛筆を置いて手を前に思い切り伸ばした。

「うわああああああ！！！」

黒い妖精が、急に迫ってきた私の手のひらのせいで慌ててしまい椅子から落ちてしまった。

「ゴメン、グート。大丈夫？？」

私の言葉に、その場にいたみんなが目を丸くした。
そして、グートが言った。

「お前、なんで俺の名前知ってるんだ？？」

「そ、そんなこと、私にはわからないわ・・・。」

それだけ言つと、私は意識を失つた。

その日私は、自分が自分じゃなくなつた気がした……。

薄い意識の中で、私は夢を見た……。

泣き叫ぶ人々。燃え盛る炎・・・。

親を亡くした子供たち。

そして、自分に向けられている、殺意の視線・・・。

その光景が過ぎ去ると、次には少女の叫び声が聞こえてくる。

「お前が“愛”を知ったから、私たちの世界は闇に染まつた！お前なんか、お前なんか消えてしまえ！！！」

そして、いつもそこで目覚めるのだつた……。

そう、いつも見るアノ夢だつた。

けれど、いつもと少しだけ違つていた。

この夢には、続きがあつた……。

少女は叫び終えると、駆けて行つた。

燃え盛る火が取り囲む、家中の中へ……。

そして……。

両親だらうと思われる【人だつた】者の首を大事そうに抱えて帰つてきた。

「これは私の両親……。大切な人たちだつたのに、あなたが全部壊した……。」

いつのまにか傍観者だつたはずの私は、夢の中でリアルになつた。

そして、一転を指差した少女の指は間違いなく私に向けられていた……。

少女は叫んだ。

「不幸の女神アリシア！お前なんか、滅んでしまえ……！」

第6話

目覚めたのは、真夜中だった・・・。
タッグもグートもベッドの横で、すやすやと眠っていた。
夢の内容が反復するように、いつたりきたりと心を揺らしていた・・・。

「私は・・・誰・・・？」

次から次へと、涙が頬を伝つた。

月の光に照らされて、涙がキラキラと光る。

青く・・・。黄色く・・・。赤く・・・。

「赤・・・。」

赤色と、炎が重なり合つて、あの時の少女の言葉がよみがえる。

「不幸の女神・・・アリシア・・・わ、私が・・・アリシア・・・？」

“アリシア”

その言葉を口にすると、老婆からもうつたあの本が光りはじめた。
怖々ながら、手を伸ばす・・・。

胸騒ぎがした。

「手に取れば引き返せないよ。」

それは、グートの声だつた。

「夢を見たんだろ？アノときの、お前が村を自らの手で焼き払つた、
アノときの夢を・・・。」

「わ、私が・・・アリシアなの・・・？」
グートは何を言わずにも、首を縦に振つた。

「どうして・・・。」

「それは、アリシア・・・。お前が一番よく知つてゐはずだ。」
グートにそう言われ、一度心を落ち着けてみる。

「思い出してみる・・・。」

私はゆっくりと目を閉じた・・・。

30分・・・。

1時間・・・。

そして、夜明け・・・。

「やっぱり、解からないわ・・・。」

「そうか・・・。仕方ないな。」

「教えてはくれないの？」

必死の問いかけに、顔をそむけるグート。

「教えては・・・くれないのね・・・。」

「俺が・・・俺が話すことは出来ないんだ・・・。お願ひだから思い出してくれ！そして・・・。」

「俺にかけられた呪いを解いてくれ？」

わって入ったのはタッグの声だった。

「寝たふりか・・・？」

鋭くグートがタッグを睨みつけた。

「おおっと、怒らないでくれよ。あまりにも一人だけで話を進めるもんだから、はいれなかつたんだ・・・。それはそうと、徐々に目覚められているのですね、アリシア様。」

タッグはフワツと手元に飛んできて、手の甲にキスをした。

「どういうこと？」

タッグは顔を上げ、私の瞳を見つめながら言った。

「そのことについても、我々の口から申すことは出来ません。アリシア様がご自分で記憶を取り戻すほかに道はないのです・・・。」
それだけを言い残し、窓から飛び去つていった。

声をかけることなんて、出来るわけがなかつた・・・。振り返つてグートを問い合わせた。

「タッグはどこへ行つたの？」

「アリシア様のことをご報告・・・。」

「どこへ？」

「言えるわけがございません・・・。」

「あなたは、どうするの？」

グートは、ただただ首を横に振った。

「ただ言えることは・・・。」

「。」

グートもタッグ同様に、それだけ言い残すと窓から飛び去つていった。

「私は・・・私は、【私】を探さないと・・・。」

私はアノ本を手に取りすみずみまで読み始めた・・・。

その日私は、自分探しをはじめた・・・。

「不幸の魔女・・・？」

そこで、私ページをめくる手が止まつた。

アリシア・・・。

「これは、私のこと・・・？」

恐る恐る読んでいった。

それは、悲しく・・・。

心が引き裂かれるような、話だつた・・・。

【不幸の魔女】

むかしむかし・・・。

それはまだ、魔女と人とが同じ村で、同じように生活していた頃の話。

生活は違えど、お互いを尊重し仲良く暮らしていた。
人が困つていれば、魔女が助け、又魔女が困つていれば、人々が助けとなつた。

魔女達のなかでも、とりわけ美しく村の人々からの信頼も厚い魔女
がいた。

それが、森に住む魔女アリシアだつた。

あるとき、アリシアの元へ一人の男が尋ねてきた。
男の名前はポット・タット。

この村では、かなり有名なドジな魔法使いだった。
彼がここにきたのは、他でもない。

アリシアに魔法を習いにきたのだつた・・・。

ポット・タットはアリシアの家の玄関につくと、戸口の前でノック
もせずに叫びました。

「魔法使いの私が言うのもなんですが、魔法を教えていただけない

でしょうか？「

もちろん心の優しいアリシアは、素直にポット・タットを家にあげました。

ポット・タットが来てから、アリシアの生活は前以上に明るいものになりました。

ポット・タットもすぐに打ち解け、毎日少しづつ魔法の練習をするようになりました。

初めのうちは、やつぱりドジな魔法使いといわれてるだけあって、ドアを吹っ飛ばしたりガラスを全部割つたり、アリシアの家がボロボロになるほどでした。

けれど、心優しいアリシアは怒るなんてことはしませんでした。

「私も、おばあ様に習いたてのころはこうだったのよ。」

そう言って、ポット・タットを慰めました。

けれど、幸せも明るい生活も新しく即位した国王によって壊されるのでした・・・。

運命の日は突然に、一人の上に無情にも降りかかりました・・・。

ある日、ポット・タットに手紙が届きました。

【王室付きの魔法使いを雇いたい。明後日までに返事を返すように】
という内容と、ビックリするぐらいの謝礼金が書かれていました。
普通の人ならすぐにでも飛びつきそうな内容でした。

けれど、ポット・タットは恼みました。

まだ、アリシアに弟子入りしてから1ヶ月・・・。

かといって、もともと使えていた、もとい成功していた魔法とは別にアリシアに教えてもらひながら習得できた魔法は、いつしか数え切れないものになり、普通なら一人前といわれる魔法使いよりも、魔法が使えるようになつっていました。

しかし、ポット・タットはアリシアと一緒にい続けることを願つていました。

そう、恋をしたから・・・。

実はポット・タットの気持ちを、アリシアは知つていました。

そして、アリシア自身も少しづつポット・タットに惹かれています。

二人の間の距離が、目に見えてハッキリと見えるようになつた矢先の王室からの手紙・・・。

二人は食事も取らずに悩みました。

【離れたくない】

素直に言葉は出なくとも、二人の心は同じでした。

「ねえ、タット・・・。」

先に沈黙を破つたのはアリシアでした。

「私は、今までずっと一人ぼっちだった・・・。けれど、あなたが来てくれたおかげで、私の生活は変わったの・・・。でも・・・。アリシアは、涙ながらにポット・タットに別れを告げる決意をしま

した。

「でも、じつしてあなたの魔法が国王様に認められた。これはとても素晴らしいことだと思うの。だから・・・。」

それ以上の言葉を、アリシアは言つことができなかつた。できるはずがなかつた。

ハツキリと「さよなら。」なんて・・・。

ポット・タットは首をうな垂れたまま、アリシアの話を聞いていました。

言葉が涙に変わるもので・・・。

そして、ポット・タットも話し始めました。

「君の言いたいことは、わかつてゐるんだ・・・。国王の、王室付きの魔法使いになれば、今まで俺をバカにしていた魔法使いたちにも顔が上げられるようになる。」

ポット・タットはゆつくりと顔をあげました。

「けど、俺は・・・。俺は、君と離れるなんて考えたくない。アリシア、君のことが好きなんだ。」

ポット・タットの気持ちを受け入れたい。

それがアリシアの素直な心でした。

けれど、アリシアは心を殺して言いました。

「タット・・・。気持ちは嬉しいわ・・・。けれど、それはせつかくのチャンスを逃してまで、手に入れなければいけない幸せかしら・・・。チャンスを希望に変えてからでも、遅くないんじゃないかしら・・・。」

そして涙を拭いて言いました。

「ここからお城までは、篠で半日もかかるないわ。明日の朝でかけねば十分間に合はず・・・。まあ、タット。お城へ行く準備をしましょー!」

ポット・タットは何も言わず、アリシアに従つた。

そして翌朝・・・。

ポット・タットは朝日を見る前に、アリシアの家から姿を消した・・・。

「さよなら」も言わずに、姿を消した・・・。
けれど、個室の窓からアリシアは見ていた。
ポット・タットの背中を・・・。
見送った。

涙とともに・・・。

「ポット・タット・・・。今までも、これからも、私が愛した唯一の人・・・。」

不幸が訪れたのは、それから間もなくのことでした。

もともと、魔法使いが嫌いだった国王は、何かにつけてポット・タツトに罰を与えました。

けれども、ポット・タツトはめげずに仕事に励みました。しかし、とうとう国王の策略にはめられてしました。それはポット・タツトがお城に来てから、半月もたたないある日の事でした……。

朝、ポット・タツトは、いつものように国王の着替えを手伝っていました。

すると突然、国王が言いました。

「ポット・タツトよ。お前はここ数日、わしのハつ当たりにもめげずによくぞ働いてくれた。わしはお前に褒美をやりたいと思う。今から言う場所に行って取ってきてはくれぬか?」

これこそが、国王の最大の策略だった……。

ポット・タツトが王室から出て行くと、王様はすぐに家来に言いました。

「わしの大切な壺を盗もうとしている輩があると聞いた。今、わしの寝室にどうやらいるらしいのだ。いつて捕らえて來い!」

そうです。ポット・タツトは王様にだまされてしまっていたのです。もちろん、ポット・タツトは捕らえられてしまいました。

「王様、これはどういうことでしょうか……。王様は私に取つてくらうことに申されたのに……。」

「なつ何を言つか!この泥棒め!…こんなヤツはやつせと死刑にしてしまえ!」

とうとうポット・タツトは王様の罠にはまってしまった……。

朝、広場の前には多くの村人が集まっていた。ある一人の魔法使いの処刑を見るために。

ソレは、もちろんアリシアの耳にも届き、アリシアは急いで広場へと向かつた。

人ごみの遠くに、処刑台が見えた。

やせ細つた一人の男と、兵士が二人。

そして、裁判長と王様が立っていた。

裁判長が長々と罪状を読み上げる。

それは、悲しみにくれるアリシアの耳には届くわけがなかつた……。

涙の遠くに、ポット・タットの視線を探す。

「タット！！」

ついにアリシアは叫んでしまつた。

広場が騒然となる。

人目を気にせずに、アリシアは王様に告げた。

「王様！私はこのポット・タットを愛しておりますー・どうか、最後の別れの時間を・・・」

アリシアの想いは言葉にならなくとも、涙が語つていた。

「よからう！ただし、5分だけじゃぞ。」

アリシアは急いで処刑台の階段を駆け上がつた。

「タット・・・どうしてこんなことに・・・」

泣き崩れるアリシア。

鎖に繋がれたまま、涙を落とすポット・タット。

そして広場までもが、泣き出した・・・。

「5分だ！！」

悲しみを裂くように、王様の声が響いた。

引き離される一人の心。

泣き叫ぶアリシアの目の前で、運命の刃は残酷にも振り下ろされた。

•
•
•

ポット・タツト処刑から2週間……。

アリシアは空白の時間を生きていた。

浮かんでは消える、あの日の風景。

涙が枯れるまで泣き続け、王を憎み続けた……。

許せるわけがなかつた。

必死に感情を殺そうともしてみた。

けれど、愛がなくなつたアリシアには抑えきることが出来なかつた。そしてその日の午後、今になつても思い出すのを恐れるぐらい怖ろしい惨劇が血の雨とともに始まつてしまつた……。

正午の鐘が鳴り響いた。

それと同時に、雨が降つた……。

それは、アリシアが降らせた血の雨。

王様の、そして家来達の。

アリシアの暴走は、止まらなかつた……。

優しかつたアリシアは今はもう、どこにもいなかつた。

城に火を放ち、民家までをも焼き払つた。

冷たくなつた瞳に涙を浮かべても、悲しみは、怒りは止まらなかつた……。

そして、多くの人々が死んだ。

魔法使いも、たくさん死んでいた……。

それでも、アリシアは止まらなかつた。

同じ頃、森の中で一人の妖精が誕生した。

それは、ポット・タツトが最後に残した魔法。

寂しさにアリシアがつぶされてしまわないようのこと……。

2匹はすぐにアリシアの元に飛んでいった。

けれど、そのときにはすでに遅かった。

火の海のなかにたたずむアリシア。

恐怖と恐れのまなざしでアリシアをみつめる人々。

グートがすぐにアリシアの記憶を奪い去った。

次の瞬間、恐怖の魔女アリシアは幼き少女へと替わった・・・。
「村の者達・・・止まるのが遅くなつてすまなかつた。けれど、
わかつてほしいんだ！アリシアだつて、こんなことしたくてしたん
じゃない！！愛するものを亡くしたせいで、力をコントロールでき
なくなつてしまつたんだ・・・。」

しかし、いくら謝つたところで村人達の怒りは収まらなかつた。

「村の人々まで、殺さなくとも良かつたじゃないか！！」

「そうだ！それに、いくら謝られても殺された者たちは帰つては來
ない！！」

怒りは野次にかわり、中には石などを投げつけるものたちまで出で
きた。

今にもアリシアを殺そうと襲い掛かつてくるものも出でてきた。

「グート一人では、ダメだつたか・・・。」

そういうと、タッグは物陰から出てきて叫んだ。

「人々は、生きている！！」

人々は一気に止まつた。

「どういうことだ？」

「アリシアの・・・。優しかったときの記憶が、全ての傷ついた村人を癒すんだ。だから、アリシアを許して欲しい・・・。」

「そんなの、虫が良すぎる！！それに、アリシアの記憶が戻らないつて保障もないだろ！」

野次は一層大きくなつた。

「それならば、アリシアの記憶が戻つたなら・・・。もし、戻つてしまつたなら今度は好きにすればいい！！」

その条件以外に、村人を静める方法はなかつた・・・。

タッグの目にも、グートの目にも涙がたまつていた。

「しかし・・・。記憶が戻つてしまつたら、お前達がどこかへ逃がしてしまふんじやないか？」

この言葉に、妖精たちは戸惑つた。

反論できなかつたのだ。

もし記憶が戻つてしまつたなら、そうするつもりだつたから・・・。

「やっぱり、逃がすんだな！それならば、生かしてはおけない！！」

村人達は、今にもアリシアに襲いかかろうとした。

そのときだつた。

一筋の光が、グートの胸を貫いたのは・・・。

グートの体は中に浮かび上がつた。

そして、妖精から人へと姿を変えた。

「村のものよ、聞いてくれ・・・。」

そこに現れたのは、処刑されたはずのポット・タットだつた。

「私は、このアリシアを心から愛していた。しかし、私はアリシアに貰つた愛を返す前に王に殺されてしまつた・・・。私は、アリシ

アに恩返しすらも、出来ぬままだつた。だから、どうしても恩を返したい・・・。それを解かつて欲しいのだ。記憶を抜き去れば、大丈夫だらう・・・。しかし、村のものが言つたとおりいつ記憶が戻つたもおかしくはない。だから、皆が見張れる場所にアリシアを閉じ込めてくれ。そこには、もちろんこの妖精たちと一緒に・・・。しかし、妖精たちだけでは、アリシアの記憶が戻つたときに逃がそうとするかも知れぬ。だから、村人の中からも監視役を出入りさせよう。それでは、いけないだらうか・・・。

村人の中には、涙を流しながらポツト・タットの話を聞くものもいた。

「それでも不安だというのなら、この妖精に術をかけておく。もしアリシアを逃がそうとしたら、村のものにそれが伝わるよ」

「どういうことだ？」

話に聞き入っていた男が言った。

「もしも、アリシアが記憶を取り戻し始めたら、この村に夜を。完全に取り戻したら、朝を持つてこさせる。」

「けれど、完全な記憶を取り戻したアリシアに、我々村人が敵うわけが・・・。」

「俺は、アリシアの憎しみの心を妖精に封じさせようと思う・・・。だから、目覚めてもアリシアの心に憎しみはない。そのときは、アリシアに聞いてやつてくれないだらうか? どう生きていくのか・・・。それとも、処刑されるのか・・・。」

彼女の記憶で癒された村人達は、すぐさまアリシアだつた少女を村はずれの森にある高い塔の上に閉じ込めた・・・。

それは、以前アリシアが住んでいたところでもあつた。

こうして、1人の少女は高い塔の上に閉じ込められた。自由と記憶とを、取り除かれて・・・。

少女がいつ目を開けるのかも、いつ自分の口に元に戻り得るのかも、それは誰にもわからないことだった。

もしも、記憶を取り戻したとき、彼女が選ぶのは・・・?

冷たい視線の中で生きる【生】か・・・。
悲しみの果ての【死】か・・・。

それすらも、誰にもわからないことだった。

心が、ここまで苦しくなったことなんてなかつた……。続きを読むとしても、涙で読むことができなかつた。

独りだつた、アリシア。

愛を知つた、アリシア。

愛するものを失つた、アリシア。

孤独を閉じ込めて、闇に飲まれたアリシア……。

記憶がよみがえる。

薄つすらと……。次第に、ハツキリと……。

「痛つ……。」

次の瞬間、胸に激痛が走つた。

呼吸が苦しくなる。

意識が朦朧とする中で、記憶が意識を消そつと押し寄せてくるのがわかる。

【アリシア】に変わひとつとする……。

感情が溢れでる。

そして、【私】は眠つた……。

目覚めたら、アリシアだつた……。

ここは、見慣れた場所。

私がいた場所は、私の城だつた。

人々は、力のコントロールがきかなくなつた私を、村の住人達が口に閉じ込めた。

タッグとグートは、私の見張り。
記憶を取り戻したときの、見張り。

それは、ポット・タットの残した、最後の魔法。

私が記憶を取り戻さないよう、分身にたくした最後の魔法・・・。

そして、あの老婆は村の希望。

私がはやく記憶を取り戻すための魔法。

こうして、明けなかつた夜に朝がきた・・・。

そして約束どおり、村に朝が訪れた。

服装を整えて、【私】を振り返った・・・。

色々な光景が浮かんでは消え、また浮かんでは消えていった。
そして、村の鐘が鳴つた・・・。

部屋の扉がたたかれる。

私は覚悟を決めて扉を開いた・・・。

無言のままつれられて、私はあの日の広場へと向かつた。
人々は、不安交じりの瞳で私を見ていた。

一つずつ、階段を上る・・・。

かつてポット・タットがそうしたように。

私が処刑台の横の椅子に座ると、裁判長が叫んだ。

「罪人、アリシア！これより、お前の公開処刑を行う。異存はない
な？」

私は、ただ一点を見つめていた。

何も語るうとは、思わなかつた……。

村の人々からは、不安の声が漏れていた。

「約束では、アリシアに聞くんじやなかつたのか？」

「アリシアが、もう答えをだしたのでは？」

「けれど、もう一度確認しなくていいのだろうか……。」

次から次へと、村人は言葉を連ねた。

ザワつきを抑えるかのように、裁判長が叫んだ。

「アリシアよ！返事をせぬか！！」

私は、スッと立ち上がると処刑台へと向かつた。

そして、言った。

「この白装束は、私の家に代々伝わる死に装束……。私の答えは、最初から決まっておりました。たとえ、村の人々に許しを与えられても、私の心は一生埋まることがないでしう……。愛するものを失つた今、私は生きる意味を無くしてしまいました。どうぞ、みなの気のすむように処刑してくださいませ。そのほうが、不安にも怯えることなく暮らせるでしょう……。」

凛とした姿で、言えただろうか。

それはもう、私には解からない……。

「いいのだな？」

裁判長の確認に、私は静かにうなずいた。

「最後に言いたいことはないか？」

私は、首を振ろうとして考えた……。

そして、自分なりの答えを出した。

「私が死んだら、私の体を灰になるまで燃やしてください。魔女は、肉体があれば生まれ変わってしまいますから……。」

「よからう……。」

裁判長の言葉に、私は安堵して目を閉じた……。

アリシアの遺体は、最後の言葉通り灰になるまで焼き尽くされた。
彼女が亡くなつた場所には、花が植えられ、そしてその花は血のよう
に赤い花を咲かせた。

まるで、アリシアの恋と死に様を語るかのようになら。

ある日、アリシアの墓に1人の男が現れた。
男の両肩には、妖精が座つていた。

いや、その妖精は眠つていた……。

男はアリシアの墓に花を生けると、光になつて消えていった。

男の名前は、誰も知らない……。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0290b/>

その日私は・・・。

2010年12月5日05時32分発行